


学校 通信 4-7	 かけはし	教育目標 <input type="radio"/> 学び合う子 <input type="radio"/> つながり、 支え合う子 <input type="radio"/> たくましい子	武蔵村山市立 第九小学校 校長 吉成かおる 令和4年10月31日
-----------------	--	---	---

「じゃあ、自分はどう考える？」

校長 吉成 かおる

知り合いの母親から、「勉強を教えていると、子供がすぐに『それは習ってないもん』と言うので困っています」という話を聞きました。確かに「習ってない」という言葉を、自分ができないことの原因にしてしまう子供がいます。例えば、調べる対象が新しくなったとき、あるいは他の教科になったとき、もっと単純に算数の問題の数字が変わっただけのとき…。しかし、教えてもらえばできる、というのではなく、「どうすれば、自分も持っている知識ややり方で課題を解決できるのか」を、考える子供に育てたいですね。

箱根駅伝で何度も優勝している青山学院大学 陸上競技部の監督の指導方針は「絶対的な答えのないところで、答えをつかむ作業をやる」ことだそうです。「上から下に答えを指示するのではなく、ヒントを与え、自分で目標を立てさせ、その工程も自ら管理させる」そうです。それを知ったとき、青学の学生は教わったことだけをやるのではなく、自分で考えることができるから強いのだと分かりました。「いや、箱根で優勝する子は元々の力が違う」と言わずに、幼少期から「じゃあ、自分はどう考える？」という思考を育てていけば、きっと、どの子も自ら課題を解決する力が身に付いていくのではないのでしょうか。

コロナ禍を経験して、私自身、世の中も学校もいつも同じではないことを思い知らされた日々でした。しかし、これから先、世の中がいつどんな状況になっても、子供たちは前に進んでいかなければなりません。

学校でも、一人一台のタブレットが配付されたことにより、調べ学習の幅が広がったり、時と場所を選ばずに学習できたりと選択肢が広がる一方で、いつ、何を、どのように学習するのかを子供自身が選ぶ機会も増えてきました。学ぶ内容や学び方を選ぶということは、それだけ自分で考える力が必要になるということです。

未来を生きる子供たちのために、ぜひ学校も家庭も、子供の「じゃあ、自分はどう考える？」を育てていきましょう。

